

## 里山アドベンチャーの記録 ～アドベンチャーレースデビュー戦～

### お誘い

朝霧で某企業のオリエンテーリングを使った研修で村越さんのお手伝いをした後、しばらくして「アウトドアの世界で何かやっていくなら色々経験したほうがよい」と里山アドベンチャーレースへのお誘いのメールをもらう。その口説き文句と、里山アドベンチャーという軽いネーミングと、研修直後の高揚感も手伝い、もともと興味のあったものでもあったので、エントリーを即決。初心者を誘うくらいだから何とかなるだろう、と。

アドベンチャーレースは3人1チームでエントリーをする。チームメイトは村越さんと宮内さん。村越さんはご存知ナビゲーションの達人。僕がオリエンテーリングを始めたとき日本のトップとして活躍し、最近は著作活動やマスコミ出演も多数ある有名人。宮内さんは国内外で活躍するアドベンチャーレーサー。彼女がトレーニングの一環としてオリエンテーリングの世界に入って来たことが、僕がアドベンチャーレースを知るきっかけだったし、彼女のスタミナには多くのオリエンティアが驚愕した。そんなレベルの高い2人と一緒にチームを組めるということもあり、2人に付いていけば大丈夫、と楽観ムードだった。そんな経緯で生まれた「TEAM朝霧」。

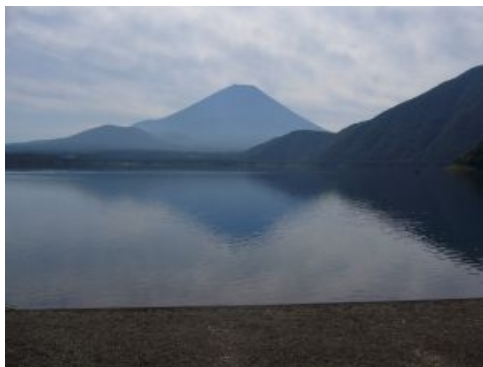
ある日、オリエンテーリング会場に来ていたアドベンチャーレーサーに「今度、里山に出るんですよ～」と話したら、「今年はノンストップらしいですよ」とのこと。さらに各セクションもそれなりに技量が必要なタフなもので、初心者がひょいっと出て何とか出来るものではないという噂を聞く。

ナビゲーションと、走ることで、ロードでのバイクくらいしか経験がない僕は、2人について行くことすらできないのでは、という不安に駆られる。宮内さんから再三誘われていたトレーニングの機会をまじめに検討し、9月の中旬ごろ、2泊3日で朝霧高原で特訓することとなった。

### 朝霧特訓

特訓1日目は移動だけ。宮内さんの棲家が素敵だった。ヨーロッパのトレキャンなどで宿泊するクラブハウスのような雰囲気。田舎で暮らすこと、アウトドアの世界で生きていくことを実感をもって知ることができる環境だった。

2日目は本栖湖でカヤックの練習。初心者向けのカヤックならばまっすぐ進める。ちょっと上級向けになるとくると廻る廻る。今度は3人乗りで試す。体重的には僕が最後尾に乗って方向維持をする、というのがベストだったのだが、とてもそこまでのレベルには達せず、舳先を沈める覚悟で先頭に座って、宮内さん・村越さんに方向維持をお願いする始末。本栖湖の対岸まで行ったり来たり。別の岸に行き、今度はラフティングボートに乗って、前に後に漕ぐ練習。腕が、指が、攣りそう。ボートやカヤックをひっくり返して、再び復帰する練習のときなどは背中まで攣りそうになる。



6時間くらい本栖湖で練習した後は、甲府盆地に降りてクライミングの練習。里山にはクライミングはないはずだが、これも経験と誘われて行ってみる。しかしパドリングで疲れきった上半身ではなすすべもなく、初心者向けのコースをクリアしただけで動けなくなってしまった。でもクライミングの楽しさはわかった！高いところに登る快感と、石にどうやって手足を乗せていくか考える戦略的なスリル。元気なときにまたチャレンジするぞー！



特訓3日目はMTBの練習。朝霧公園から富士山麓を登っていく。最初は緩いアスファルト、傾斜が少しくつくなって、少しして下り気味の林道トレイルを走る。このあたりはとても気持ちいい。林道の終点から再び登り。今度は砂利道の辛い林道を延々登っていく。砂利道が終わり、足で走るのも厳しい岩場の小道登り。時にバイクを押しながら宮内さんがどんどん登っていくのがんばってついて行く。

「登りはここまでですよ」と言われるまでとても長く感じたが、後で地図を見返したら全行程の1割にも満たなかった。登りのあとは長～い下り。富士山の斜面をまっすぐ降りていくものだからスピードがどんどん出る。折りきったあとは、朝霧へ向けて国道を戻る。

この3日間の特訓で得た教訓として、パドリングなど技術のいるものはまったくダメ。完走のためには無駄な力を使わずにロスをいかに小さくするか、そこを考えないとダメだということ、MTBは力技でなんとかなる、という甘い観測。このときにバイクを担いで登る練習(体験)をしておくべきだったと、レースのときになって後悔するのは後の話。

夜の打合わせなどで、チームメイトの2人が、完璧にこなすことを言葉の節々に感じさせながら会話をしているのを一人心細く聞いている。「俺、最後まで動けるか不安です」とはなかなか言い出しにくい感じ。でも2人についていけば必ず完走できるはずという安心感も生まれ、必死でついて行こうと決意をあらたにする。

---

## ギアの準備

9月19日、クラブカップ7人リレーの前にもMTBの練習をしつつ、準備を進める。

ノルディックスポーツさんで紹介されている日本未導入のSILVAのヘッドランプを無理言って譲ってもらい、菅平のナイトミニロゲインでテスト。明るさ抜群で不安なく走れる。10時間は耐久性があることがわかり、本番でも使うことに。実際に使ってみたら、さすがに明け方頃には明るさが落ちてきた。元がとても明るいだけに、ちょっと明るさが落ちると気になってしまう。まあ夜中までのレースとか明け方からのレースとか、短時間で使う分には問題ないからしばらく愛用しよう。



使い慣れているドイツ製のバイク用バックパックで出走しようと思ったが、重さが気になる。少しでも軽く、かつなるべく容量があって使い勝手のよいバックパックを探し、昼休みや帰宅前にいろんなショップをうろろ。最終的にはサロモンのXA 25を選択した。軽さと容量、いろんなギアを後から拡張できる点を重視。実際に使ってみた感じとして、ウエストポケットの位置もよく、使い勝手のよさは個人的にはバッチリ。ただ胸のバックルがすぐ取れてしまうので、別のものに取り替えたほうがよさそう。



靴は使い慣れたサロモンのXT WING(2008年バージョン)。水の中でも、激斜面でもオールマイティに使えた。お気に入りだったのだが、今回のレース後に靴裏をみたらツルツルになっていた。これまでたくさん走ってきても磨り減ることなかったのに。恐るべしアドベンチャーレース。



ハーネスなどのクライミング用具は村越さんから借りたし、バイク用品も普段乗っているクロスバイクから流用できるものは流用し、ないものは宮内さんから借りた。そういう意味でもこの2人の協力が得られたことは助かった。1から全部揃えたらすごい金額になっちゃうもの。でもあったらあったで行動範囲が広がるものなので、揃えるのも悪くはない。

---

## 食料問題

問題は食料。これまで長くても6時間くらいしか動き続けたことがない。最近では赤城山のトレラン大会のスイーパーで8時間くらい動いたのが最長だけど、そのときは歩くだけの時間も長かった。1時間以上動くだけで腹が減ってしまうので2時間のオリエンテーリングでも補給が必要な人間。3時間くらいのトレランではジェルと水分でなんとか済んでいるが、24時間を越えるとなると想像ができない。さらに手荷物は軽くしたいし、預けられる荷物は量が制限され、かつ受け取れるポイントも限られている。どこで何を補給したいか、効率的な補給ができる食料は？ここが一番思考を巡らせた部分だ。結局持っていったものは次のとおり。

手荷物:ジェルを4本、最中、黒糖あめ、はちみつ200ml、おにぎり2個、どら焼き1個、アミノバイタルプロ1袋、スポーツドリンク1.5L、コーラ500ml

リネンバック(1日目夜に補給):もち、最中、スープパスタ、かりんとう1袋、おにぎり1個、スポーツドリンク1.5L、コーラ500ml

メッシュバック(2日目朝に補給):最中、ジャンボどら焼き1個、ジェル1本

途中で買ったもの:コーラ500ml

途中で振舞われたもの:豚汁

1日目に持っていた食料は、夕方には切れてしまった。2人からお菓子をもらってなんとかリネンバックが受け取れるところまでビバーク地点まで行き、ビバーク地点で補給。ここで振舞われた豚汁に救われた気がする。夜中のトレッキングはあまり食べる気がせず、朝は残り少ないことからあまり補給しなくても不安はなかった。これから正念場だ、という場所ではジェル(カフェイン入り)を補給し、脳が落ちないようにした。ちょっと少ないかなと思ったが、意外もった。特に2日目以降は、1日目より食べなくても動けたのは脂肪を燃やす回路にスイッチを入れられたからかもしれない。長時間動けるための補給量がわかったので、ちょっと長めのトレイルランレースなどにも挑戦してみようかな。

---

## レース前夜

そんなわけでいよいよ本番。10月2日、夕方に家を出て、夜7時半に水上へ。2人と合流し、準備。レンタル予定のMTBがまだ用意されてなかったが、焦らず他の荷物の準備を進める。ロープセッションの事前講習を受けたり、荷物を各バックに振り分けたり。チームメイトの2人はどこへ行っても有名で、いろんな人に話しかけられる。みんながみんな「宮内の生活費を取りにきた」「(優勝当然なんだから)出ちゃだめだよ～」といったことを言ってくる。ちょっと待って～、と内心ドキドキする。

夜9時からのブリーフィングで翌日のレースの説明を受ける。地図を見てコースがわかるとワクワクしてきた。地図を見ればゴールまでのラインが引ける。それがゴールへ到達できる自信が生んでくれた。



なんだかんだで夜中まで準備はかかり、日が変わってレース当日の1時頃に会場のクラブの建物内にマットを敷いて寝袋で寝る。ようやく眠気が出てきた頃に、「ここで寝ちゃダメ、駐車場でキャンプするように」とお達し。

真夜中にテントを張り、眠る。せっかくの眠気が覚め、夜中に到着したチームのエンジン音などでなかなか寝付けず、ウトウトし始めたら起床時間の4時半。テントの中で着ていた防寒具を荷物に詰め、最後のパッキング。最初のラフティングに備え、レンタルのウェットスーツを着込み、朝ごはんはサンドイッチとおにぎりとヨーグルトを食べて準備万端。スタートへ向かうバスへ乗り込む。天気はやや小雨。バスの中の温かさにほんの数分だが熟睡した。スタート前の説明を受け、スタートラインに経つ。いよいよスタート。



---

## 1日目 ラン&ラフティング

まずは基本の走ることから。ラフティングボートに乗り込む利根川上流まで水上駅前を走っていく。ランのスピードはジョグ程度。レースを考えれば当然のペースだが、ハイスピードなのではないかと不安もあったのでひとまず安心。

ランを先頭で走り、ラフティングポイントへ。本栖湖での練習は流れのない中だったが、今回は利根川の川下り。他のチームと競り合いながら順調に進む。利根川の渓流がすばらしく、田舎の吉野川を思い出す。急な流れのところでは遊園地のアトラクションのようにバコンバコンとボートが揺れる。もう気分は観光。



課題であるフリップリカバリー（ボートをひっくり返して復帰させる）地点では無事にボートに復帰できた。その後、岩に上陸し、チェックポイントを取った後、川に飛び込み、再び乗船という課題。泳ぐのが得意ではなく、水に苦手意識があったので、最初に飛び込んで水に慣れようと勇気を出した。最初のこの儀式は意外と効果的で、2日目のキャニオリングステージでも水と戯れながら進むことができた。

ラフティングはその後も順調で、最初のトランジットポイントに到着。ここでウェットスーツを脱ぎ、MTBへ。若干小雨。宮内さんに言われてフリーザーパックで防水対策を施したウェア類は雨に濡れることなく快適だった。

---

## 1日目 MTB

地図で見ても長い時間を要する事が容易にわかるMTBステージ。利根川沿いから三峰山へ向かってひたすら登る区間が始まる。最初はアスファルトの登り。登りの辛さを我慢すればなんてことはない。4つ目のチェックポイントを取り、いよいよ勝負の分かれ目CP5へ。CP5は三峰山のピーク（山頂）の1つに設置されている。ピークの真下は崖の表記。遠目に見ても急峻な傾斜が見て取れる。ルールブックによると山頂までの登山道がどこかにあるらしい。ここで1つのことに気づく。アドベンチャーレースでは、ルートの位置がわかっていてもあえて地図に表記しないことがあるらしい。登山道がある、という情報だけ与えておいて、地図からそれを推測させるのもレースの1つの要素なのだ。

ここで村越さん曰く「登山道は必ず尾根線を通っているはずだから、登山道をすぐに発見できなくても尾根線に出ればなんとかなるはず」。その理論は僕にでも容易にわかる。手前に伸びる尾根線上で登山道を探すのも理にかなっている。そこで登山道が見つからないから、そのまま尾根線を登っていく、走るだけなら全然普通なことだ。今日はMTBを持っているけど、まあアドベンチャーレースだし、こんくらいは当たり前だろう。でもちょっと待って。目の前に崖が見えてきた話は別だ。ひき返すでしょ、普通。しかしナビゲーションの達人は、獣が作ったトラバース道を見つけ、そこを登っていく。普通に歩いて登るだけでも滑り落ちそうなところをMTBを持って登る。このまま落ちたら怪我じゃ済まないよね。。泣きそう。これがアドベンチャーレース！？

泣きながら（本当に涙が出ていた気がする）、しかしなんとか尾根線まであがる。天国にたどり着いたかのような気分だ。尾根線に出たらCP5は直ぐ。CP6までは、緩やかな尾根線を下るだけ。もう怖いものはない。



続くCP7は地図に載っている道がヤブで埋もれていて発見できず、いわゆるCヤブをMTB持ちながらやぶ漕ぎ。それはさほど苦痛ではない。最初にあの崖のぼりを経験したことは、僕にとってはある意味よかったのかも知れない。

そしてここで奇跡が起こる。一番後ろでヤブにひっかかっているとき、脇に白い紙を見つける。ゴミかな、と思うもどこかで見たことのある紙質が気になりMTBを置いて手にするとコントロールカード。最初は設置のときに誰かが落としたのかな、と思った。自分のチームのそれだとは思わなかったのだ。しかしよく見ると「TEAM朝霧」と書いてあるじゃないか。危ない、これなかったら失格だよな？？　そういう危機感が実感を持って生まれるまでに少し時間がかかった。これでもし優勝できたらMVPは僕だな、とニンマリ。

三峰山からはしばらく下り基調だったが、MTBステージ最終地点の森林公園へ向けて再び登り。この登りが体力的に辛くて、2人との差が開いてしまったが、なんとか最初のMTBステージをトップでクリア。気づけば12時。スタートしてから早6時間。この先は既に未知の時間帯。お腹がとても減る。最中やらお菓子を食べまくる。

## 1日目 オリエンテーリング

専門分野オリエンテーリング。しかし最初はMTB-O。順番にポイントをまわるポイントO形式。まだまだMTBから逃げられない。MTB-O、ルートを引くだけならなんてことはない簡単なコース。が、登って下りてを繰り返すタフなコース。しかも走るのではなくてMTB。かなりの区間で押し・担ぎも予想され、そしてその予想通り辛い戦いだった。MTBステージの疲れを思慮して、序盤は荷物を宮内さんが持ってくれた。そのおかげで体力が回復。荷物なんてほんの数Kgなのでそんなに変わらないだろう、と思っていたが、この差がずいぶん違う。後半、今度は村越さんが辛そうになってくる。結局、このセッションだけで2時間半も掛かっている。

続いてフット-O。スコアO形式。地形図とはいえ1:15000に拡大した地図。過去の経験からゆっくり走っても3時間はかからない、歩きを入れても主催者予測の4時間なんてとてもかからないだろう。ここは閉門になって19時までには「先に進めない」。ただしスコア-Oの全てのコントロールを取ったチームは先に進める。19時まで4時間ちょっと。コンプリートして19時前に閉門を通過することは十分に思えた。

「全部とりましょう」という宮内さんの言葉にここはうなずく。だって、これで負けたらオリエンティア失格でしょ。最近得意のロゲイン経験を活かして全部を取るルートを決めていく。村越さんと大まかなルートを決めて、続いて細かなルート取り決定していく。前半のアップダウンのある出戻りの多いレグを我慢さえすれば、後半はずっと下り基調。最後の登りがちょっと辛いけど、時間に余裕はあるし最後はゆっくり登っても余裕でしょ。

苦手なMTBを降りたので元気が出てくる。ランは楽だ。ここが僕の得意分野。これまで楽をさせてもらっているはずだからできる限りチームに貢献できる動きをしようと、先に進みコントロールを早めに見つけ、出戻りで2人に楽をしてもらおうと心がける。最初のコントロールから順調に進む。途中、尾根下りで何度か方向を誤りそうになる。後から村越さんがストップをかける。地形図を使っているナビゲーションでは敵わない、否、O-MAPを使ってもナビゲーションだけではこの人にはまだまだ敵わないのだな、ということに気づかされる。オリエンテーリングがまだまだ早くなれる気がしてきた。

そんなこんなで順調にこなしていく。出戻りが続くタフなレグをこなした直後、先頭を進む宮内さんが「痛い、痛い」と叫ぶ。(何！?)と思った瞬間、僕の足にも痛みが。しかも連続で。一瞬何が起こったかわからず、その次の瞬間に蜂だ、と思う。宮内さんが身をかがめてうずくまるのを見て、しゃがむ。手にも虫が止まっているのが見える。蜂よりも蛇に近い形にも見えたが、刺し方で蛇ではないと感じる。止まっていたは刺されるだけで、逃げなくて、走る。しばらく追われるも何とか襲撃が収まるまで逃げ切る。何箇所も痛い。スズメバチではなかったが、しかしどんな種類の蜂か良くわからず、少し不安になる。痛みはそれほどひどくならなかったので、しばらくしたら元気回復。

後半戦。少しずつ暗くなり、ヘッドランプを使い始める。新しいSILVAのヘッドランプは快適。しかし、暗さへの不安は消せず、体力的にも元気がなくなりつつあるのがわかる。さらに時間が思ったよりも掛かっている。残り2時間で半分以上こなしたと思ったが、そこからが長かった。このころ手持ちの食料や水分が尽きかける。残りの体力が心配になり、ペースもダウンさせる。2人の後ろを歩く形になる。いろいろ心配事が増えると蜂の痛みにも気づく。

前を行く2人が最後までコントロールを取るべきか、取らざるべきかを話し出す。走れば取れる、走れなければ取れない、そう思っていた。宮内さんは行ける、村越さんは危ない、という意見。ゴールかつ最後のコントロールへ続くロードの登りで3人もあまりペースが出せず、時間が迫ってくる。村越さんの判断で1つ諦めることとした。残り3つだったのを残り2つにして、その1つ目を取る。結果的にはこの判断が正しかった。しかしやはりオリエンティアとしては悔しい部分だ。

最後の1つ目はゴールそばにある樹木。余裕でしょ、と思って最後に回していたのだが、、行ってみたら樹木の上の方に吊るされている！登って取れと。そうか、これはオリエンテーリングのレースではないんだ、とあらためてショックを受ける。木登りの得意な宮内さんでも簡単ではない、と体力温存を考えて泣く泣く断念。まあポイントも少なかったので大勢に変化はないはず。

Foot-Oのゴール。19時まであと10分を切っていた。3人ともすっかり消耗していたので、関門が開かれる19時にはスタートせず、少し休んでから次へ進むことにする。MTB-Oまではトップだったし、スコア-Oもパーフェクトを逃したとはいえペースが悪かったわけでも激しくツボったわけでもない。まだトップじゃないかなと思ったら、あるチームがパーフェクトを達成し、19時にスタートしていった、という情報が聞こえる。

あー逆転されたな、でもそのほうが気楽でいいや、と思っていたが、僕は宮内さんと村越さんの目の色が変わったのを僕はこのとき感じた。彼らはやはり負けず嫌いなのだ。あらためて彼らのどこまでも勝負師としての性格を感じた。彼らがオリエンテーリングで全日本チャンピオンになり、僕は2位どまりなのは、貪欲さが足りないからなんだ、そう思う。

---

## 1日目 MTBその2 & ビパーク地点

つなぎのレッグ。森林公園を下りて、沢沿いの道をビパーク地点のスキー場まで登るだけ。距離もさほどなく、余裕だろうと思っていたが、まずすっかり日が落ちてしまい下りがものすごく寒い。続いて登り。これまでに比べれば緩い登りのはずなのに、体が疲れ切ってなかなか動けない。村越さんが特に辛そうだ。ときに押しながら坂道を登り1時間ほどかけてビパーク地点。

ビパーク地点にも先に進めない関門が設けられていて21時までは待機しなければならないが、ここで眠る必要はない。TEAM朝霧は21時になったら出発の準備をすることにした。つまり実質1時間のみの休憩。この間に夜中のトレッキング(上州武尊山)に向けて、ビパーク地点に運ばれたリネンバックから防寒具を装備。そして夜の食事。スープパスタや餅など用意した食料を食べる。さらに豚汁が振舞われた。この豚汁がとてもおいしく、助けられた。眠気覚まし用に預けていたコーラも取って休憩。村越さんが寝袋に入って横になっていただけで、3人とも仮眠をすることなく、21時を迎えた。そういえばスタートからすでに半日以上経っている。思えば遠くに来たもんだ。

---

## 1日目～2日目 トレッキング

標高がめちゃくちゃ高いわけでもなく、登山客の多そうな登山道を登るだけ。ナビゲーションが難しいわけではない。トレッキングは眠気との勝負だと思っていた。

果たしてそのとおりだった。ビパーク地点で食べ過ぎたせいもあり、いきなり眠くなる。それ以上に村越さんが辛くて、途中で動けず、宮内さんが荷物を背負うことに。ゆっくりと登り始めるが、それでも回復せず、10分間仮眠をすることに。動いていると気づかなかったが、実は寒い。道端に3人で横になって眠る。僕はここではあまり眠れなかった。横になって足の疲れを癒せたくらい。

起き上がったら体が冷え切っている。その体を奮い立たせるべく再び登り始める。武尊山の手前の剣ヶ峰の尾根線に他のチームの光が2つ見える。それが遠いのか近いのか、よくわからない。気づけば後には別ルートから登ってくるチームの明かり。自分たちのペースが早いのか遅いのか、なにもわからない。剣ヶ峰へのアタックを始めるころ、意識がとびとびになる。

宮内さんが先頭に立ち、ペースを作る。剣ヶ峰からの下り、武尊への登り。ここがどこなのかよくわからなくなる。頂上がどこなのかかわからず、ただ前に伸びる道を進む。足取りは重い。暗くて助かった。周りの景色が見えていたら、別の恐怖心があったかもしれない。宮内さんがやってきて、荷物を持ちます、と言ってくれたので再びその言葉に甘えて、身軽になる。「前に行く村越さんもがんばってます。追いつきましょう」と励まされ、ときにく進む。村越さんが「がんばれ！」と声を掛ける。村越さんも回復したのか、と顔を上げるとそこは頂上だった！ やっと登りきった。実はレースを通じてここが一番嬉しかったポイントかもしれない。すでに日が変わって0:40。登り始めて3時間半経っているのか。そしてまだあと半日残っている。

あとは下りだけだと意気込んだが、その下りが鎖場のある険しい下りだった。疲れた、眠い頭、ナビゲーションを放棄して、前に行く村越さんを追いかける。後に行く宮内さんは僕の荷物も抱えて厳しい下りを下りてくる。大丈夫なのだろうか？でも、ここは甘えさせてもらおう。じゃないと動けなくなってしまう。山頂のCP11から次のCP12まではさほど遠くないはずだが、しかしずいぶん遠く感じた。CP12を過ぎて少ししたところから尾根線を外れて斜面を下り始める。下り始める前に村越さんが「寝よう」と言う。

僕も眠くてたまらなかつたから、相槌を打つ間もなく横になり仮眠。時間はわずか5分。しかしここでは完全に眠りに落ちた。5分して起き上がり下り始める。荷物はすでに宮内さんから返してもらっていた。この下りも沢の中を進む足場の悪い下り。しかし村越さんを先頭に登山道を外れることなくすすむ。この人は本当にナビゲーションを体で覚えているのだな、と思わせる。まだ僕は地図を見る気力がない。

ようやく緩い斜面になってきた頃、1つ前のチームが見える。相手が見えると元気になる。追いついた、と思ったらそのままあっさり追い抜く。そして快適な林道へ。ここで宮内さんが「余裕があるなら走りましょう」という。村越さんがやや躊躇した。僕も走れる気力があるだろうか、と思いつつ、しかし武尊で宮内さんがペースを作ってくれた恩返しだと思い、下りだけでもがんばろうとペースを上げて走る。意外と体が動く。たった5分の仮眠が意外と効いているのかもしれない。

CP13を取って、CP14へ。当初のプランだと尾根を切るようになっていたが、今の体力を考慮して登らない道周りを選択。これが正解で、先頭に行くチームに追いつく。スコア-Oを全部取ったというチームだ。これを抜いて、かつつけような差をつけないと優勝できない。そう思うとなんだかがんばりたくなってきた。長いトレッキングステージの終わり。

---

## 2日目 ロープ&キャニオリング

4:30にCP14に到着。ここにも関門が設定され、5:30までは待機。次のステージは滝を下りるロープセッションと溪流を下るキャニオリング。キャニオリングではウェットスーツを着なくてはいけないので、多くのチームはこの地点でウェットスーツを着て、ロープセッションへ向かう。しかしTEAM朝霧は宮内さんのアイデアで、1日目に使った濡れたウェットスーツで休むよりは温かい格好で休んだほうがよいと判断し、着替えずに休み。そのおかげで、荷物入れ替えなどを行っても休憩時間を長く取れ、ここで20分くらい仮眠できた。

5:30。すでに明るい。トップでロープセッションへ向かう。なんと40mの滝の上から下るのだという。いきなりこれがあったら、僕は怖くてたじろいだかもしれない。でも、もういろいろ経験してきた。あまり恐怖はなくロープに身を任す。目の前を滝が流れている。絶壁だ。地面は遥か下の方。でも恐怖心はなかった。(すげえ、俺こんなことやってる)と自分を褒めながら降りる。3人が降りて、キャニオリングへ向かう。向かう途中のロープを使っ



ての激斜面登りが意外ときつかった。

ロードを走って、キャニオリングポイントへ。ここでウェットスーツに着替える。ライバルチームは先へ進む。しかしこのとき、スコア-O満点説がガセネタだったと知らされる。しかし実際のポイント差ははっきりせず、その後の時差などを考えると、どれだけ余裕があるのかはわからない。10分くらいは勝ってるはずと勝手に思い込む。

キャニオリングはいきなりスライダー。つまり滑り台。急な流れの岩の上を滑る天然のウォータースライダーだ。少し躊躇した。泳ぎが苦手なので、落ちた先でおぼれないかな、と。しかし先に下りた宮内さんがすぐに足を立てていたのを見て安心。滑っていくとこれがとっても気持ちいい！ハマりそうだ。





その後には滝つぼへの飛び込みがあったが、これも気持ちよく飛べた。安全だとわかっていれば怖くはない。本当に怖いのは安全なのかどうかわからない状態の場所に進むことだ。そういう意味では今回は完全なアドベンチャーではない。

が、ライバルチームは進みが早い。テクニックに差があるなど感じる。実はこのチームは昨年の優勝メンバー2人を含む強豪チーム。その後に待ち構えるカヌーやMTBで差を広げられると我々の優勝は遠のく。

---

## 2日目 カヌー

キャニオリングで意外と時間を要して、藤原湖岸にたどり着いたときには8:30前。いよいよ問題のカヌー。本栖湖での苦痛が思い返される。

カヌーを湖岸に運ぶまで既にクタクタだった。さらに重い荷物を持っており、3人乗るのもやっと。さあ漕ぎ始め。。。右ヘクルツ、左ヘクルツ。。。宮内さんの掛け声むなしくなかなか進まない。ライバルチームはどんどん先へ進む。上手だなあ。。。。



宮内さんが「上陸できるとこでなるべくカヌーを運んだほうがよいですね」と言うので上陸してカヌーを運ぶのもまいち効率がよくない。ついに宮内さんが「私は泳いでいきます、2人で漕いでください」と言う。

この場面で泳ぐ、と言える宮内さんが光って見えた。その言葉通り、彼女は、泳いだり、湖岸を走ったり、カヌーに引っ張られたりしながら、そして男2人だけでバランスをとりやすくなったカヌーで何とかこのステージをこなす。カヌーに3人で乗らなくてはならない、というルールブックには書かれていなかったとはいえ、まず素人では思いつかないし、思いついてもやらないんじゃないだろうか。

---

## 2日目 MTBその3

いよいよ最後のステージ。残すはゴールまでのMTBのみ。要らないものはここですべて預けられる。ということで防寒具やらなにやらすべて預けようとしていたが、宮内さんが「これは必須装備ですから」と言っているのを聞いて気づく。そうか、必須装備は常に持っていかないとダメなのか。ここまできて失格なんてことになっちゃいけない。(あるチームはここでGPSを預けてしまい、失格となってしまった)

ライバルチームとの差は10分ちょっと。今のままだと優勝はぎりぎりなのは。

MTBラストステージの入りはさほど厳しいものではない。アスファルト道を下り、川沿いのやや細いシングルトラックのトレイルを進むだけ。このステージのメインはラストコントロールへのアタックと脱出。まったく美的センスを感じない登って降りだけのCP24。

地形図のコンタから、ほとんど担がなくてはいけなだろうことが僕でも想像できる。ほどなく送電線の管理道の入り口を見つける。さすがに昨日のような無茶はしない。道が見つからないからと言って、また直進しよう、なんてことになりゃしないかと思っていたのでちょっと安心。

登り始めるとき村越さんが「さあ行くぞー」と言っていた(ような気がする)。冷静な村越さんが興奮しているように見えた。そんな様子を見て、苦手の担ぎを少しでも楽にできるよう、水をほとんど捨てた。食べ物もほとんど食べた。そして先を行く2人を追いかける。

これはコースプランナーからのゴールへ向けた洗礼だ。儀式なのだ。これを終えれば幸せになれる。途中でとても苦しくなった。村越さんが荷物を持ってくれた。おかげで楽になった。最大500mくらいの登り。昔よく登っていた筑波山の登りコースと同じくらいだ。筑波山にいるんだと想像しながら登る。

気づいたら尾根線に登っていた。思えばあっさりしたものだった。送電線下のラストコントロールを取って、下り斜面へ。崩れやすい斜面を葛折りで下る。前のチームが見えた！が、体が動かない。MTBを落とさないようにするのが精一杯。ライバルチームもチームメイトも先に進んでしまう。負けちゃダメだ、勇気を出すんだ、と斜面を転げる覚悟で下ろうとするが、なかなか体が、気持ちが前に進んでくれない。

下りきったときにはライバルチームは見え、2人が待ってくれていた。トップゴールは絶望的。申し訳ない気持ちにもなったが、しかしよいゴールだ、という興奮が高まる。山道を下り、スタート直後に走った温泉街へ。ちょうど水上駅でSLが煙を上げて見物客に囲まれていた。全てが祝福してくれているように感じた。会場が見え、ゴールへの誘導係のスタッフがみんな拍手で迎えてくれる。スピードを上げる。ゴールテープ手前に本当のラストコントロール。それをパンチしている2人を見て、涙が出そうになる。やっとゴールだ！3人でゴールテープを切った。13時過ぎ、スタートから31時間。



## レースが終わって

レースが終わってからはあっという間だった。宮内さんが遠くの駐車場までMTBで車を取りに言ってくれた。男2人は結局最後まで彼女におんぶにだっこだった。今回のレースを象徴するかのようで少し笑えた。車に乗って会場へ戻り、シャワーを浴びたり、後片付けしたり、ちょっと休んだり。レースについて振り返る気にもなれず、放心状態だった。

ふたたびゴール地区へ戻り、表彰式で優勝したことを知らされる。優勝したなんて実感はなく、ただただ完走できたことへの喜びと2人への感謝の気持ちでいっぱいだった。

優勝賞金の10万円のほとんどは参加費へと消え、残った分を3人で分けた。スントの時計やノースフェイスのカバンをもらったが、賞品よりも2人が初アドベンチャーレースの記念にと譲ってくれた今回のコントロールカードが一番嬉しかった。



帰りの電車はずっと寝ていた。レースが終わってから再び蜂の痛痒さが戻ってきた。

月曜・火曜は仕事をがんばれたが、水曜日に急に来てしまい、休んでしまった。

チームとしては本当に恵まれていた。初心者の僕が完走できたのは、やっぱり村越さんと宮内さんがいたからだと思うし、自分がチームにもものすごく貢献した、という感覚はない。デビュー戦を飾るには贅沢すぎるメンバーに恵まれた。

しかし初心者なりにトレーニングはして行ったし、準備もいろいろ聞いて万全と思える状態で臨めた。チームの役割について事前の打合わせをいっぱいしたわけではないけど、これまでの付き合いで知っている範囲でお互いの性格を活かしつつ、うまく助け合いながら進めた。

これまでのトレーニングの積み重ねがあったからこそ、という村越さんの褒め言葉は、つまりはオリエンテーリングでの経験があったからこそ、ということだ。大会への準備のアプローチには自信があったが、その手法は分野が変わっても通用するということは、自分に、自分が築いてきたものに、大きな自信を得られた。

レースから1週間が経とうとしているが、未だにレースのことが鮮明に思い出される。武尊へのトレッキング中に、なんで好き好んでこんなことやっているんだ、と思ったときがあった。何もしてなければ布団で寝ている幸せな時間。もう絶対にやりたくない、と思ったはずだし、レース直後ももういいや、と思っていたはずなのだが、あのレース中の感覚を再び味わいたい、という欲望が心のどこかにある。2回目はあるのか。それはまだ自分でも分からないけど。